

露萩

泉鏡花

青空文庫

「これは槇さん入らつしやい。」

「今晚は——大した景氣ですね。」

「お化に景氣も妙ですが、おもいのほか人が集りましたよ。」

最近の事である。……今夜の怪談会の幹事の一人に、白尾しらおと云うのが知己だから槇を別間に迎えながら、

「かねがね聞いております。何時いつも、この会を催しますのに、故わざ

とらしく、凄味、不氣味の趣向をしますと、病人が出来たり、怪

我があつたりすると言います——また全くらしゆうございますか

らね。蒟蒻こんにやくを廊下へ敷いたり、生大根の片腕を紅殻で落した

り、芋ずいきで蛇よを振り下げたり、一切そんな悪戯いたずらはしない事にし

たんですよ。ですが、婦人だけでも随分の人数にんずです。中には怪談を聞く人でなくて、見るつもりで来ているのも少からずと言った形ですから、唯ほんの景ぶつ、口上ばかりに、植込を向うへ引込ひきこんだ離座敷に、一寸ちよつと看板を出しました——百もの語がたりにはつきものですが、あとで、一人ずつ順に其処そこへ行つて、記念の署名をと云った都合なんで、勿論もちろん、夜が更けましてから……」

——この時もう十一時を過ぎていた。榎真三が、旅館兼料理屋の、この郊外の緑みどりけん軒けんを志して、便宜で電車を下りた時は、真夏だと言うのに、もう四辺あたりが寂寞ひっそりしていたのであった。

「……尤ももつと、行儀よく一人ずつ行くのではありません。いずれ乱脈でしょうから、いまのうち凄惨しつせん——ははは、凄くもあります

まいが、ひとつ御覧なすつて、何うぞまた、何かと御注意、御助言を下さいまし。」

「御注意も何もありませんが、拝見をさして頂きましょう」

「さ、何うぞ此方へ。」

——後で芳町よしちょうのだと聞いた、若い芸妓げいしやが二人、馴染なじみで給

仕をして、いま頃夕飯を、……ちようど茶をつがせて箸を置いた。

何う見ても化ものには縁の遠そうな幹事の白尾が、ここで立つと、

「あら、兄さん、私も。」「私も。」と取りつくのを、「お前さ

んたちはあとにおし。」で、袖を突いて、幹事室を出るのに、真

三は続いた。

もよおし

催はまだはじまっていな。客は会場の広室ひろまに溢れ、帳場ここ

ぼれ、廊下に流れて、わやわやとざわめく中を、よけるようにして通つて、一つ折曲る処で、家内総出で折詰の支度に料理場、台所を取乱したのを視ながら、また一つ細く成る廊下を縫うと、其処にも、此処にも、二三人、四五人ずつは男、女が往来う、たたず何しろ暑いので、誰も吹ぬけの縁を慕うのであつた。

「では、此処から庭へ——」

「あれですか。」

真三は、この料亭へは初めてだつたし、夜である。何の樹とも知らないが、これが呼びものの、門口に森を控えて、庭の茂は暗いまで、星に濃く、燈に青く、白露に艶かである。その幹深く枝々を透して、ぼーッと煤色に浸んだ燈は、影のように障子を

映して、其処に行燈あんどうの灯ともれたのが遠くから認められた。

二枚か、四枚か。……半ばは葉の陰にかくれたが、亭ちんこのみの

茶座敷らしい。障子一枚細目に開けてあるのが、縦に黒く見えて、薄すすきか、蘆あしか揺ぐにつれて、この催とて、思いなしか、長く髪の毛の動くような色が添った。

「下駄があります、薄暗うございますから。」

「やあ、きみじやったな、……先刻さつきのは。——」

縁のすぐ傍わきに居て、ぐるりと毛脛けずねを捲まくったなりで、真三に声を

掛けたものがある。言ことばつきで、軍人の猛者もさか、田舎出の紳士かと

思われるが、そうでない。赭あから顔で一分刈の大坊主、六十近いが、

でっぷり膏あぶらぶとり肥がしたのに酒気をさえ帯びている。講中なんぞ

の揃^{そろい}らしい、目に立つ浴衣^{ゆかた}に、萌葱^{もえぎ}博多の幅狭^{はばせま}な帯をちよつきり結びで、二つ提げ淀屋このみの煙草入をぶらつかせ、はだけにはだけた胸から襟へ、少々誇張だけれど、嬰兒^{あかんぼ}の拳ほどある、木の実だか、貝殻だか、赤く塗った大粒を、ごつごつごつと、素ばらしい珠数^{じゆず}を掛けた。まくり手には、鉄の如意^{にょい}かと思う、……しかも握^{にぎり}太^{ふと}にして、丈一^{たけ}尺ばかりの木棍^{ぼくこん}を、異様に削りまわした——憚^{はばかり}なく申すことを許さるるならば、髻髻^{ほうふつ}として、陽^ようけい形なるを構えている。

——槇真三は、ここへ来る、停車場を下りた処で、実は一度、この大坊主に出会った。居^{いどころ}処は違つたらしいが、おなじ電車から、一步おくれで、のっしのっしと出たのである。——馴^{なれき}切つた、

土地の人らしいのが三四人、おりると直ぐに散ったほかは、おなじ向きに緑軒へ志すらしいものの影も見えなかった。思いのほかで。……夜あかしだと聞く怪談には、この時刻が^{でざか}出盛りで、村祭の^{なわて}囃ぐらいは人^{ひと}足^{あし}が落合うだろう。俵も^{くるま}並んでいるだろう、……は大あて違い。ただの一台も見当らない。前の広場も暗かった。改札口を出たまでで、人に聞かぬと、東西を心得ぬ、立^{たち}淀^{よど}んで猶^{ためら}予^らう処へ、^{あら}顛^たわれたのが大坊主で、

「やあ、君。」

と、陣笠なりの汚れくさったパナマを仰向けて、

「緑軒の連^{れんじゅう}中^{ちゆう}じゃあないかな——俺も此処ははじめてだ。乗

った電車から戻り気味に、逆に踏切を一つ越すツてこツたで、構

わずその方角へ遣つけよう。……半分寝ている煙草屋なんぞで道を訊くのもごうはらだからな。」

真三は連立つた。

「化ものの会じやあねえか、氣のきかねえ。人魂でも白張提灯ちんでも、ふわりふわり出迎えに來れば可い。誰だと思ふ、べらぼうめ。はッはッはッ。」

最もう微ほろよい酔のいい機嫌で、

「——俺は浅草の棍こんげんきよう元教あらたおしえと言う、新に教を立てた宗門の先せん達だだよ。……あとで一説法ひと刎はねかすが。——何せい、この一喝いっかつを啖くらわすから、出て來た処で人魂も白張も、ぽしやぽしやは、ぽしやぽしやだ。」

と、そいつが斑まだらはげ剥はだが真赤に朱で塗つてある——件くだんの木棍てのひらで掌たをドカンと敲たたいた。

真三は、この膏濃しどうけんい入道は、処なも、浅草だと言う……むかしの志道軒しどうけんとかの流ながれを汲む、慢心した講釈家かなんぞであろうと思つた。

会場へ着いて、帳場までは一いっしょ所だったが、居合せたこの幹事に誘われて、そして彼は別室へ。

「ええ、先刻は……彼あそこ処こに、一寸した、つくりものがあるんだそうです。」

「うむ、御趣向かい。見ものだろう。見ぶつするかな。……わい

。」「

どしんと縁へ尻餅を搗ついた。

「苔が、すべる。庭下駄の端緒はなが切れていやあがる。危えじゃねえ

か。や、ほかに履きものはがあせんな。はてね。」

「お氣をつけなさいまし。」

それなり行こうとした幹事の白尾を、脛すねを投出したまま呼留めた。

「氣をつけねえじゃいられねえや——もし、徽章きしょうを着けていなさるからには世話人だね、肝煎きもいりだね。この百二三十も頭数のある処へ、庭へ上り下りをするなり、その拵こしらえものを見に行くなり、お前さんたちが穿はいて二足、緒の切れた奴が一足、たった三

足。……何、二足片足しかねえと云うのは何う云う理合りあいのもんだね。」

「何うも相済みません。ですが、唯今は、ほんのこれは内ない々ないの下見なので。……後に御披露の上、皆さんにおいでを願う筈はなはに成なっています。しかし、それとても、五人十人御一所では……甚はなはだ幼稚な考えかも知れませんが、何の凄味も、おもしろみもありません。……お一人、せいぜいお二人ぐらいずつと思ひまして、はきものの数は用意をしません。庭を御散歩なさいますなら、下足をお取りに成つて……御自由に。——」

「あら、一人ずつで行くの、可こ恐おそいわね。」

と、傍かたえぎきして、連つれらしいのに、そう云つた頸えりの白い女がある。

「何が可恐いものか。へん、俺がついてる。」

その連でもないのに、坊主は腕まくりをして、陽木棍で膝を敲でいて出しや張ばった。

「坊主、一いちごん言もありませんな。」

植込を低う抜けながら、真三が言った。その槓いだが、いまの弁いとき解を聞くまでは、おなじく、この人数にんずに、はきもののその数は、と思つたのだそうである。

処が、

「いいえ、出たらめに遣ツつけましたがね、……ハツと思ひましたよ。まったくの処不行届きだったんです。……あれではとても足りません。何てツたつて、どうせ大勢でしようから、大急ぎで

草履でも買わせて間に合せる事にしなければなりませんまい。」

——で、後にその草履の用意は出来た。変化^{へんげ}、妖怪、幽霊、怨

念の夜だからと言って、そのために裾^{すそ}、足の事にこだわるのでは

ないのだが、夜半^{よなか}に、はきものの数さえ多ければ、何事もなかつ

たろう。……多人数^{たにんず}が一所だから。処^{ところ}が、庭はじとじとしている。

秋立^{なぬか}って七日あまりも過ぎたから、夜露も深い。……人の出あし

は留^とめなかったが、日暮方、町には薄い夕立があつた、それがこ

の辺はどしや降りに降つたと言う。停車場からの窪地は道を拾う

ほど濡れていた。しかも植込の下である。草履は履く時からべつ

とりして、踏出すとぐつしよりに成る。納涼^{もよおし}がてらの催だが、遠

出をかけて、かえりは夜があけるのだから、いずれも相応めかし

ていて、羽織、足袋穿たびばきが多かった。またその足袋を脱ぐのが、怪しい仕掛のあると云う、寮りようがまえ構へ踏込むのに、人住まぬ空屋以上にな気味だから、無造作に草履わらじばきでは下立おりたたないで、余程ものずきなのが、下駄のあくのを待つて一人、二人ずつでない、怪しい席へ入らなかつた、——そのために事が起つたのである。

さて、濡縁ぬえんなりで、じかに障子を、その細目にあけた処へ、裾がこぼれて、袖垣そでがきの糸いと薄すすきにかかるばかり、四畳半一杯の古ふる蚊帳るがやである。

「……ゆきかえりに、潜らせようツてつもりですが、まあ、あとで中を御覧なさい。」

そう言つて、幹事の白尾は、さらさらと蚊帳を押しながら、壁

を背高く摺すつて、次の室まへ抜けて行く。……続くと、一いつしよく燭よくの
 電燈、——これも行燈にしたかつたと言う——朦朧もうろうとして、茄
 子の牛うずくまが踞うずくまつたような耳みみ盥みだらが黒く一つ、真中に。……青く錆
 びたわたしを掛けて、鉄漿壺おはぐろつぼを載せ、羽毛楊枝はねようじが渡してある。
 ……横斜よこななめに、立杵みたの台に、円形まるの姿見を据えた。壺には念入
 りに鉄漿みたを充みしてあるので、極熱ごくねつの氣に蒸れて、かびたような、
 すえたような臭氣におが湧く。

「巫女いちこの言いいぐさではありませんが、（からのかがみ）と云つた方
 が、真個ほんとうは、ここに配合うつりが可よいのですが、探した処とで磨とがない
 では、それだと顔がうつりません。——いろいろ凄こわい話を聞いて、
 ここへ来て、ひよいと覗く。……こう映ると……」

首を伸ばした白尾に釣られて、^{ひと}齊しく伸ばした頸を、思わず引込めて真三は縮まった。

「我ながら気味が悪かろうと言つたつもりなんで。……真夜中の事ですからね。——その窓際の机に向つて署名となると、是非ここが氣に成るように斜^{はすかい}違に立てました。——帳面がございます。葬礼の控^{ひかえ}のように逆^{さかさ}とじなどと言う悪^{あく}はしてありませんから、何なら、初筆^{しよふで}を一つ……」

「いや、いずれ。」

と云つて、真三は立つて覗いた。丸窓の小障子は外れていて、外に竹藪のある中に、ハアト形にどんよりと、あだ蒼い影が、ねばねばと、鱗^{うろこ}形に溶^{とろ}けそうに脈を打って光っている。

「仕掛ものですよ。」

「蒟蒻。」

「いえ、なまいか生烏賊で。」

いきれにいきれて、なまぐさ腥く、ぬる暖くプンと臭つて来る。おはぐろのともつれ合つて、何とも言えない。……それで吐き戻したものがあつた。――

床の間には、うつし写で見知っている、おうきよ応挙の美女の幽霊が、おなじく写して掛つていた。これは、長崎の廓で、くるわ京から稚い時かどわかされた娘に、ろうがい癩の死際に逢つて、しも応挙があわれな面影を、ただそのままに写生したと言う伝説の添った絵なのである。目のきれの長い、まつげの濃い、しも下ぶくれの優しい顔が、かりそ

めに伝うる幽霊のように、脱落骨^{こつりつ}立などしているのではない。心もちほどは寔^{やつ}れたが卵^うの毛ほどの疵^{きず}もなく、肩に乱れた黒髪をその卵の花の白く分けて、寂^{さみ}しそうにうつとりして、しごき帯の結びめの堆^{うずたか}いの^{かえ}に、却^{かえ}つて肌のかぼそさがあらわれて、乳のあたりはふつくりと艶^{えん}である。大きく描いて、半身^{はんしん}で、何にもなしにつつと、軸の宙で消えている。

香炉^{こうろ}に線香を立てて、床に短刀が一口^{ひとふり}あつた。

「魔よけだと申しますから、かたがた。……では蚊帳の中を一つ。……あとでは隔^{へだて}へ襖^{ふすま}を入れますつもりです。」

敷居からすぐに潜^{くぐ}つたが、唯^と、見る目も涼しく、桔梗^{きぎよう}の藍^{あい}が露に浮く、女郎花^{おみなえし}に影がさす、秋草模様の紹縮^{ろちりめん}緬^{めん}をふわりと

掛けて、白のシイツを柔に敷いた。やわらか 桃色の小枕ふつくりと媚かし
いのに、白々と塔婆が一基（しろじろ 釈玉）——とだけ薄りと読ま
れるのを、面影に露呈に枕させた。あらわ 頭に捌いて、字にはらはらと
黒髪は、髻を三房ばかり房りと合せたのである。かもじ みふさ ふつさ ぬしありやまた
新に調えたか、それは知らない、ただ黒髪の氣をうけて、枕紙の
真新しいのに、ずるずると女の油が浸んでいた。にじ

「あの行燈には苦心しました。第一、金が出ています。かね」
と笑いながら、

「古さと言ひ、煤け工合、鼠の巢のようなぼろぼろの破れ加減を
御覧下さい。……四谷怪談にも使うのを、そのまま小道具から
借出しました。浅草でしてね。俳優やくしやの男衆おとこしゆが運んだんです

が、市電にも省線にも、まさか此奴こいつは持込めません。——ずっと俤くるまで通しですよ。」

「自動車も大袈裟となりますと、持ものに依つては、電車では気がさしますし、そうなると俤くるまです。……」

と、ふと、もの思おもう状さまに、うっかりした様子で真三が言った。

「私も、——昨年ですが、塔婆とつぽを持って、遠道とおみちを乗った事があるんです。……」

「へい、貴方あなたが塔婆を……」

と、古行燈の目を移して、槇の顔と枕を見た。視みたが、

「おや、塔婆が真白だ。」

と、熟じつと白尾が瞳を寄せ、頬を摺るばかりおかしく傾いて鼻で

きいて、

「白粉だ。おしろい」

——誰か悪戯に塗つたと見えます。ちよッ馬鹿な：

：御覧なさい、薄化粧ですぜ。この様子じゃ、——信女しんによ……とある処へ、紅べにをさしたかも知れません。」

「はあ、この塔婆は、婦人のですか。」

問う声も何となくぼんやりする。そのわけで……枕の色も、閨ねやの姿も、これは、——定いちじようさもあるべきを、うかうか聞くのであったから。

「勿論です——何処か、近まわりの墓地から都合をするように、私たちで、此家ここのうちへ頼ちゆうもんんだんですが、それには、はなから婦人のをと云う註文ちゆうもんでしたよ。」

さらぬだに、魔の行燈と、怨霊の灯と、蚊帳の色に、鬱^{うつ}し沈んだ真三の顔を、ふと窺いつつ、

「尤も、無縁なのを、……それに、成りたけ、折れたか、損じたかしたのをと誂えたんです。——見ましたがね、この塔婆は、随分雨露に曝^{さら}されたと見えて、半分に折れていました。……」

「で、婦人だと分りましたか。」

「確^{たしか}です、（信女——）尤も、ささくれてはいましたが。——何か、貴方？……」

「いいえ。」

と、ややはずきりして、

「何でもありません……唯、此処へ来ます道に、線路の踏切があ

りましょう。……停車場から此方こちらは、途中真暗でした。あの踏切
 のさきの処に、一軒氷屋がまだ寝ないでいましたが、水提灯が一
 つ、暗くついただけ、暖簾のれんは掛ばなしで、誰も人は居ないのです。
 檐のきした下に、白と茶の大きな斑ぶちいぬ犬が一頭ひとつ、ぐたりと寝ていました。
 ——あの大坊主と道づれでしたが。……彼奴あいつ、あの調子だから、
 遠慮なしに店口で喚いて、寝惚ねぼけ声をした女に方角をききました
 つけ。——出かかると、寝ていた犬がのそりと起きて、来かかる
 先へ、のすんです。——私は大嫌だいきらひですがね——（犬が道案内
 をするぞ、大先達の威力はどうだ。）ツて坊主は得意でいました。
 踏切がこんもりと、草の中に乾いた川のように、こう高く土手を
 築ついた処で、その、不性ぶしょうたらしい斑うねが、急に背筋に畝うねを打って

狂つて飛上るんです。何だか銜くわえて、がりがり噛りながら狂うんですよ。越すのに邪魔だから、畜生畜生！……呶鳴どなると、急にのろりとして、のさのさと伸びた草の中へ潜りました。あとにその銜えたものが落ちています。——（宝ものかと思えば、何だ、塔婆の折おれつぱし端を。）一度拾ったのを、そう言つて、坊主が投出す——ああ、草の中へでも隠したら、と私が思ううちに、向うへ投ほうつたもんですから、斑犬がぬいと出て、引銜ひつくわえると、ふツと駈けて、踏切むこうへ。……もう氷屋の灯の届かない処へ消えたんですが。（何の塔婆ぐらい。……犬に骨を食わせるも悟さとだぜ。——また説いて聞かせよう。……だが、見ねえな、よみじ見たいな暗がりの路を、塔婆の折おれを銜えた処は犬の身骸からだが半分人間に成つ

たようだ。三世相^{さんぜそう}じゃあねえ、よく地獄の絵にある奴だ。白斑の四足で、面^{つら}が人間よ。中でも婦^{おんな}のは変な気味合だ。轆轤^{ろくろくび}首は処女^{しんぞ}だが、畜生道は、得て眉毛^{まみえ}をおとしたのつぺりした年増だもんだな、業^{ごう}曬^{ざら}しな。……私は可厭^{いや}な心持で、聞かない振^{ふり}をし
て黙りこくつて連立って来たんですが——この塔婆も、折れたんだとお話しですから、ふと……何だか、踏切の、あの半分じやないかと云うような気がするんです。」

「怪談怪談。」

幹事は陽気に軽く手を拍^うつて、

「そのお話を、是非一つ、会場の広間で願いまししょう。少々、蛇体を加えて、ここに胴から上、踏切の尾の方と言うような事にな

れば実^{ほん}ものです。ねえ、槇さん。」

塔婆が青い。びくびくと蚊帳が揺れた。

「ええ、飛んでもない。」

「何、そのかわり楽屋では何でもない事——幾らもあります事です。第一この塔婆だつて、束にして、^{そだ}鹿朶、^{かれつば}枯葉と一所に、位牌堂うらの壁際に突込んであつたなかから、（信女）をあてに引抜いて来たツてね、下足の若い衆^{しゅ}が言っていました。折れたのも^{ひし}挫げたのも、いくらも散らかっているんですよ。」

真三は、それでも引入れられそうに黙ったが、

「——（釈玉——）とだけ、あとは、白い撫^{なでしこ}子を含んだように友染の襟にかくれています。あなたは、そのあとを御存じでし

ようかしら。」

「……見ました、下は、……香——です。——（釈玉香信女）^{によ}です。確に、^{たしか}……何ですか、一つまくつてお目にかかるとしますかね。」

真三は、手を^{おさ}压えるように^{ひし}犇と留めた。

「串^{じょうだん}戯^{にょ}にも、女の字へ、紅をつけたろうなぞツてお話でした。塔婆は包んでありません。婦人の裸もおなじです。」

幹事は、世情に通じて、ものの分った人である。

「ああ、よくお留め下さいました。——決してこの蒲団はまくりません。——が、何か、貴方、お氣になさる事があるんですか。」

「さあ、いいえ。」

「が、それでも。」

「戒名に、一寸似たのがあるんでしてね。」

「いや、それは。それならお氣になさいますな、なさらぬが可^ようございます。この宗門の戒名には、おなじのがふんだんですよ。

……^{こと}特に女のは、こう云う処で申しては如何^{いか}だけれど、現に私の

家内の母と祖母とは戒名がおなじです。坊さん何を慌てたんだか、おまけにそれが、……^{しきていさんば}式亭三馬の浮世床の中にあります。八百屋のお柚^{ゆず}の（釈縁応信女。）——喧嘩にもならず、こまっちまいます。」

寂しい声だが、二人で笑った。

「さ、その気であちらへ参りましょうか。」

「いずれくわ悉しいお話を。」

「あ、蚊帳から何か出ましたかね。」

真三はゾツとした。が、何にも見えない。

「……小さな影法師のようなものが。」

「私たちの影でしょう。」

と、行燈の左右に立つて、思わず四辺あたりがみまわされた。

「槇さん。」

「は、」

「あなたは、おはぐろの煮える音は御存じでありますまいね。お互に時代が違いますが、何ですか、それ、じ、じ、じ……」

「虫ですかしら……油が煮えるのでしよう。」

幹事は耳を澄したが、

「いえ、行燈の灯は動きません。……はてな、おはぐろを嘗^なめる音かしらん。」

「……………」

「それもお互に知りません——ああ、ひたひたと、何の音だか。」

「ああ。」

「あれだ。」

殆ど同時に声を合せた。次の六畳の真中の、耳^{みみだら}盥^{うえ}から湧くように、ひらひらと黒い影が、鉄漿壺を上下^{うえした}に二三度伝った。

くろとんぼ
黒蜻蛉である。

かねつけ蜻蛉が、ふわふわと、その時立つたが、蚊帳に、ひき誘われたようにふわりと寄ると、思ひなしか、中^{なか}すいて、塔婆に映つて、白^{おしろい}粉をちらりと染めると、唇かと見えて、すつと糸を引くように、櫺^{れんじ}子の丸窓を竹深く消えたのである。

幽霊の掛軸は、直線を引いて並んだ。行燈の左右のこの二人の位置からは見えない。が、白い顔の動いたような気^け勢^{はい}がした。

「考えものです——発起人方、幹事連と、一応打合せて、いまの別^{はなれ}亭の事は誰にも言わずに、人の出入りをしないようにした方が可^いいかとも思います。」

植込を返しながら、白尾がしんみりと葉の下に沈んで言った。

「……広間が暗くなっていますね、……最^もう会をはじめました。

お気をつけなすつて。……おお、光る……」

「いなびかり。」

「いいえ、樹の枝にぶらりぶらりと、女の乳を釣^{つる}したように——
可^い厭^やにあだ白^{しろ}く、それ、お頭^{つむり}の傍^{そば}にも。」

「ええ。」

「あちらが暗くなると、ぽかりぽかり光り出すと言って、……此^こ
家の料理方の才覚^{やっば}でしてね。矢張り生鳥賊を、沢山にぶら下げま
したよ。」

もとの縁側。それから廊下は明るかった。が、広間の暗^{くら}中^{がり}に
吸込まれて、誰も居ない。そのこぼれた裾、肩が、女まじりに廊

下に背ばかりで入乱れる。

料理場の前には、もう揃った折詰の弁当がうずたかに堆く、戸を圧して並んだが、そこへ幹事が通りかかるのを見ると、蔭から、腰掛を立て、しるしばんてん印半纏の威勢のいいのが顔を出して、

「白尾さん。この折詰を積んだ形がが一番の棺はやおけ桶などは、どんなものです。」

と手柄顔で言った。幹事は苦笑をしたばかり。

処へ、ほんの唯五六人で、ぽとぽと沈めた拍手があつた。会の趣が趣であるから、故と遠慮わざをしたらしい。が、ちやうど発起人を代表して、当夜の人気だった一俳優あるやくしやが開会の辞を陳べ終つた処であつた。

真三は幹事の白尾と行きがかりに立留つて、人々の背後うしろから差
 覗いて、中を見た。十畳と八畳に、廻まわりえん縁えんを取廻して、大いおおき日ひ
 の字形に、襖を払った、会場の広間は、蓮の田に葉を重ねたよう
 に一面で、暗夜やみに葉うらの白くほのめくのは浴衣ゆかたである。うちわ
 も扇も、ひらひらと動くのが見えて、僅わずかに廊下から明りを取った
 並居る人顔も、臃おぼろを霞かすめて殆ど見分けのつかない真中処へ、トタ
 ンに首のない泥すっぱん鼈かめの泳ぐが如く、不気味に浮上つたのは大坊主
 頭であつた。

「分つた、分つた。——それ、いま發起人の言つたとおり、御銘
 々話を頼むぜ。……妖怪、変化、狐狸こりかわうそ、獺た、鬼、天狗、魔ものの
 類たぐい、陰火、人魂、あやし火一切、生霊、死霊、幽霊、怨念、何で

も構わねえ。順に其処へ顕あらわかせろ。棍元教の大先達が、自在棒おつとを押取つて控えたからには、掌たなそこをめぐらさず、立たちどころ処に退治してくれる。ものと、しなに困よつては、得脱成仏やもさして遣る。……
あいて対手によつては、行ぎようりき方が手荒いぞ。」

と煙草盆をガンと敲いた。

「女小児こどもは騒ぐなよ。如何いかなるものが顕われようとも、涼しい顔で澄しておれ。が、俺がこう構えたからには、芋虫くさい屁へっぴり虫も顕われて出はすめえ。恐れをなすな。うむ、恐れをなすな、棍元教の伝沢でんたくだ。」

「……もしもし。」

「大先達の伝沢だぞ。」

「もし、お先達。」

と俳優やくしやがすつきりと居直った。

「あなたのお氣に入るか何うかは分りませんが、この会は、妖怪を退治たり幽霊を濟度するのが趣意ではありません。……むしろ、怪しいもの、可恐おそろしいものを取り入れて、威おどすものには威され、崇るものには崇られ、怨むものには怨まれるほどの覚悟で、……あるべき事ではないのですが、ろくろ首でも、見越みこし入道でも、海坊主でも。」

ひやひやと低声こゝろえで言つたものがある。

「ここへ躰ていわれるのを迎えたいと思うんですから、何うぞ、行力も法力も、お手柔かな所で願いたいです。」

今度は大勢で拍手した。この坊主、みな面が憎かつたに相違ない。

「半分わかつた。——さあ、はじめろ。……とに角何でも出ろやい、ばけものの出たところ勝負だ。」

と音を強く、ぐわんとまた煙草盆を木棍で敲いたのである。

もの争いがあつては、と中に立つらしい気構で、白尾は人をわけて座へ入つた。

海岸らしい——話の様子で。——（避暑中の学生が、夜ふけて砂丘の根に一人、浪を見た目を大空の星に移していたが、渚をすらすらと通りかかる二人づれの女の棲に、忽ち視線を海の方へ引

戻された。月なき暗い夜に、羅の膚が白く透く、島田鬚と、ひさし髪と、一人は水浅葱みずあさぎのうちわを、一人は銀地の扇子を、胸に袖につかつて通る。……浪がうつすりと裾を慕って、渚の砂が千鳥にあしあとを印おして行く。ゆく手に磯に引揚げた船があつた。ちようどその胴のあたりへ二人が立つた。が、船底が高くつて、
舷ふなばたは、その乳のあたりを劃しきつて見える）

一人、談者だんしゃの座にあつて恁かく語る。……この話を、槓が座に加わつて聞いたのは、もう二時を過ぎた頃であつた。——先刻、白尾と別れてからは、何となく、氣屈し、心が鬱しづするので、ひとりもとの幹事室へ歸つて、出来得るなら少時しばらく身体を横にもと思つたが、ここも人数にんずで、そうも成らない。あの若い芸妓げいしやは、も

う其処には居なかつた。それはそれで、懇意みしりごしなものも、見知越みしりごしなものも、いずれも広間へ出たらしく、居合したのは知らぬ顔ばかりであつた。が、心易ことばく言を掛けられるのに、さまで心も置けないで、幾らか胸は、開けたが、しかし、座に久しく成りすぎる。媚なまめかしいのも居ただけに、そういつまでも妨ぐべきではあるまい。些ちと彼方あちらへもお顔をとられるにも、気がさして、われからすすむともなく廊下を押されて、怪談の席へ連つらなつた。人は居余いあまるのだから、端近はしぢかを求むるにたよりは可よい。縁から片膝ずれるほどの処へ坐ると、お、お、と話中だから、低い声だが、前後に知合の居たのも嬉しくつて落着いた。時に聞いたのである。……前の筋道は分らない。（――渚の二人の女は舐みよしを切るか、そこへは白浪が、ぎ

あぎツとかかる。大方^{とも}艦^{とも}へ廻るであろう。砂丘つづきの草を踏んでと、学生が見ていると、立^{たち}どまっていた二女^{ふたり}が、ホホホと笑うと思うと、船の胴^{ふなべり}を舷^{ふなべり}から真二つに切つて、市松の帯も消えず、浪模様の裾^{もすそ}をそのままに彼方^{むこう}へ抜けた。……）——

あ^{あた}か
恰^{かい}もこの時であつた。居る処の縁を横にして、振返れば斜^{ななめ}に向^む合^あう、そのまま居れば、背^{うしろ}さがりに並ぶ位置に、帯も袖も、四五人の女づれ、中には、人いきれと、温^{うん}氣^きにぐつたりとしたものがある。その中から、こ^{きぬ}う俯^{みじろ}向き加減に、ほんのりと艶^{つや}の透く顔^{かほ}を向けて、幽^{きぬ}かな衣^{みじろ}の身動^{みじろ}ぎで、真三に向直つた女があつた。

「あなた。」

「……………」

「槇さん。」

「あ、」

と云ったが、その姿は別の女の背と、また肩の間に、花弁はなびらを分けたようにはさまって、膝も胸もかくれている。明石あかしの柳条しなの肩のあたりが淡く映った。

「今夜はよく入いらっしゃいました。」

「は。」

もとより怪談最中である。声あるだけに、ものいいは低かった。が、またこの折には、あちらでも、こちらでも、ひそひそ話が泡あ沫ぶくに成つて湧いたから、さまでに憚るでもなかったもので、はつきりと聞えたのである。が、誰だか分らぬ。思い当る誰もない。

「失礼ですが、つい……誰方どなたですか——暗いので。」

「暗い方が結構です。お恥かしいんですもの。……あなたには、まことにお心づけを頂きまして、一度、しみじみお礼を申しとう存じました。」

「……失礼ですが、全く何うも……」

「ええ、あの、私の方は、よく存じておりますんですよ。……」

（——そうすると、二人の女が、船を抜けて、船を抜けてから、はじめて、その何とも言えない顔で、学生を振向いて、にこりと笑った。村の方では、遠吠の犬がびようびようと鳴くし、丑満うしみつの鐘。……）

「可厭いやですね、まあ、犬は可厭でございますこと。」

一層声が低かった。が、うつとりと優しい顔、顔、顔よりも、
生際はえぎわがすつきりと髪かみの艶が目に立った。

「坊主も可厭ですわ。」

「何処に居ます。いま……」

「あ、あれ、かねつけ蜻蛉が飛びますの。」

この声がきこえたろう。女たちの顔が、ちらちらと乱れて、その瞳も、その髪も、恰あたかも黒い羽のようにちらついた。ひらひらひらひら。

真三にものを言つた女は、その中の誰であつたか、袖のいろいろに紛れて、はらはらと散る香水と、とめきの薫かおりに紛れたのである。

話もちょうど一ひとくぎり齧らしい。

とに角かく、きき取っていたのが、一同に気を放ち、肩を弛ゆるめて、

死んだ風が渡るように汗に萎えた身体は皆動いた。

「誰方どなたか泣いていらつしやりやしませんか。泣いていらつしやりやしませんか。……御婦人のようですが。」

幹事白尾の声である。

「泣いていらつしやるようですね、——御気分の悪い方があるんじゃないやありませんか。」

泣いて、……泣いている……と囁く声が、ひそひそと立って、ふと留やむと寂然しんとした。

「間違いでしたか——大丈夫ですね。……それでは誰方か、また

お話を。」――

談者一人、脱いでいた薄羽織を引かけるのが影の如く窺われて、立つて設けの座に直った。

再び、真三の右斜めの、女の肩と、女の胸との間へ、いまの美しい顔が見えた。

「私ですよ、泣いていますわ。」

濡々ぬれぬれとおくれ毛が頬にかかるのが、ゾツとするまで冷く見えた。

「……………」

「坊主が可厭で……可厭で……私……」

「坊主、さ、何処に居ます。」

思わず膝を立てて、声を殺しながら、その女に差寄つて聞いたと思うと、

「え、坊主?……」

と振向いて聞返したのは、翡翠の珠も眉に近い、それは幹事室で見た先刻の芸妓であつた。——この連中が四五人居たので。中にいまのそれらしい面影は煙にも見えない。

「失礼しました。」

極りも悪し、摺り状に退つた。心は苛立つ、胸は騒ぐ。……

「坊主は何うしました。」

何うしました? 坊主は、坊主は。——身近な処から顔見知の人たちに、真三は、うかうかと聞き廻る。……さあ、何処へ行き

ましたかと云う。今しがたその辺に見えたと云う。……何等の交渉のないのも居た。——坊主——坊主？——幾度も、うるさ煩く口を出したと云う。会の方から故障が出たと聞いたのに、たよりを得て、うろうろ人なかを手さぐりで、やつ漸と白尾を見て、囁いて聞くと、私たち三人がかりで片かたわき傍へ連出して、穩かに掛合つたので、何うにかしずま静つて黙つたが、あの八やツ頭を倒に植えたような頭は、いま一寸見当らない、と真三とともに座中をすか透した。勿論、話手を妨げないように、幹事側とて、わけて、ひそひそ、ひそひそと、耳をつけ、頬を合せて、あっちへも、こっちへも、坊主は、坊主は——真三に取つては、あの坊主が此処に居れば、幾らか気は安まつたのである、が、見当らない。

坊主は、——坊主は——ああ、我ながら、いやな坊主を口で吐はいて、広間じゅう撒散まきちらしたようで、聞く耳、交す口に、この息も嘸さぞ臭かつたに相違ない、とほツとした、我がその息さえ腥なまぐさい。むかツとして胸を圧おさえて、沓脱くつぬぎへ吐つきもどすように、庭下駄を探った時は、さつき別亭はなれへ導かれた縁の口に、渠かれ一人、あざれた烏賊の燃ゆるのを樹この間まに見つつ、頸筋、両脇に、冷い汗をびっしり流して、ぐったりとしたのであった。

要するに、麗おんなしき婦は塔婆の影である。席に見えないとすると、坊主、坊主が別亭へ侵入して、蚊帳を乱していはしなあやぶいかと危あやぶんだためなのであった。

「どうかお聞き下さい。……お鬱陶しいでしょうが、お聞き下さい。——僕は洋画かきの、それもほんのペンキ屋ですが……」

槇真三は、^{ねや} 閨の塔婆に引添うて、おなじ ^{まくらもと} 枕頭にくくった毛脛に、手がつかないばかりにして言った。——いまこの数寄屋へ入ると同時にハツと思つたのは、大坊主が古行燈の灯を銀の俵張の煙管にうつして、ぷかぷかと吹かしていた処、^{やに} 脂を吸つたか、舌打して、ペツペツと憚らず蚊帳に唾を吐いた。ああ、その勢で^や 行られては。……蚊帳を捲^{まく}つて入る処へ、つかつかと上るのを、坊主は見返りもしなかった。

「何をなさるんです。」

「行力を顕わすのよ。」

それから、あらたまつて謙遜^{へりくだ}りつつ言つたのである。――

「私には、たいせつな先生があります。ただお若くつてなくなり
ましたが、それは世に有名な方です。その墓が青山にあるんです。
去年あの震災のあとに、石碑が何うなつたろうと思つて、まあま
あ、火にも、水にも、一息つけるように成ると、すぐに参りまし
た。……ただもう一^{ひと}なだれです、立派な燈籠は碎けて転がる、石
の鳥居は三つぐらゐに折れて飛んでいる中ですから、口惜^{くやし}いが、
石碑は台の上から、隣の墓へ俯向けに落ちて、橋に成つていたん
です。――管理所を尋ねて、早速起し直すように頼みましたが、
木で鼻をくくると言うのはその時の応対でした。――金に糸^{いと}めさ
えお着けなさらなければ今日中にでも起します、尋常の御相談で

すと、来年に成りますか、来々年さらいねんに成りますか、そこは承合うけあえま
 せん、墓どころじゃないでしょう、雨露を凌しのがないのがどのくら
 いあるか知れませんか、御華族方だつて、まだ手をつけちゃいま
 せん——と、取つてもつけない情なさけなくもあるし、癩しやくにも障さわりまし
 た。……大勢の弟子のうちから、地震に散ちらばらないのだけ、四五
 人誘さそい合あつて、てこに、麻縄、鋤すき、セメントなんどを用意して、
 シヤツにズボンばかり、浴衣たすきに襷いきがけの勢おしで推お出したんです。が
 人の注意で、支度ばかりしましたものの、鋤もセメントも何う使
 つて石碑を起すんだか誰も知りません。——知合の墓地近くの花
 屋から、とに角、監督だけにと云つて、ほか仕事で忙しい石屋の
 親方を一人頼みました。この石屋が皆の意気込を買つてくれて、

さし図どころか自分で深切しんせつに手を添えてくれた時、皆で抱まわしに、隣の墓から、先生の墓所の前へ廻し込んで、一段、段石だんいしを上げるのに、石碑が欠けちやあ不可いけない、と言うと、素早い石屋が、構わねえで、バシリと半分にへし折って、敷いてかった塔婆が一本、じき隣ではありません。一つ置いた墓地はかじなので。——尤も倒れたのを引出した事は知っていますが、……それが、この塔婆です。戒名は御婦人です。」

と、やや息せいて、ハンカチで汗を拭って言った。

「故わぎとらしいと思いますから、友だちの見ない間に、もとへ戻して、立掛けて、拝んで挨拶をして、その日は済みました。——氣に成りますから、……ずっと十二月しわすまでおくれましたが、墓はかまい

詣の時、茶屋で聞いて、塔婆のぬしの菩提寺がわかりました。

その菩提寺が遠方です……遠方と云つて、……むきは違いますが、それがこの土地なんです。」

「虚構こしらえるぜ！」と冷笑わらつた。大坊主はじろりと顔を見た。

「いや、拵こしらえ事では決してないのです。墓所にはまだ折れたのがそのままでありましたから、外ほかのと違つて、そう言つた事情わけで、

犬にも猫にも汚させるのが可厭いやでしたから、俤ではるばると菩提寺へ持つて来て、住職にわけを言つて、新あらたに塔婆を一本古卒塔婆ふるそとば

の方は些いささ少ですが心づけをして、寺へ預けて、往ゆかえり、日の

短い時の事です。夜に入いつてから青山の墓へかわりのその新しいのを手向たむけたんです——（釈玉香信女。——施主は小玉氏こたまです、

——忘れもしません。……誓ってそう云った因縁があるのですから、私に免じて、何うか、この塔婆はなぶ瓢らないで下さい。」

「瓢る。——瓢るとは何だ。」

「これは申過ぎました。何うか、お触りに成らないでおくんなさいまし。」

「触るよ、触るどころ処か、抱いて寝るんだ。何、玉香が、香玉で

も、女おんな亡じやは大抵似寄りだ、心配しなさんな。その女じやあ

るめえよ、——また、それだって、構わねえ。俺が済度して浮ばして遣る。や……な、昨今だが、満更知らねえ中じやねえから、こんなものでも触るなと頼めば、頼まれねえものでもねえが、……誰だと思ふ、ただ人ひとと違うぜ。大棍元教の大先達びとが百ものたり

の、はなれ屋の破行燈やれあんどうで、塔婆を抱いて寝たと言えば、可恐おそろしさを恐れぬ、不気味さにひるまない、行力法力の功德として一代記にかき込まれるんだ。先まず此奴こいつは見せ場じゃあねえか。」

「ですから、手について頼むから。」

「頼まれねえ。ただ人とは違うよ。好色すきからとばかりなら、みょうだいを買った気で、一晩ぐらい我慢しようが、俺のは宗旨だ、宗旨だよ。宗門がえをしうと言って誰きが肯くやつがあるものか。昔のきりしたんばてれんでさえ、殺されたって宗門は変えなかつたぜ。」

「私の親類だと思って。」

「不可いけねえ。」

「姉だと思つて。……妹だと思つて。」

「不可え！」

「じゃあ、己の家内なら何うするんだ。^{おれ}」

^{けしき}気色ぼんだが、ものもしない。

「矢張り抱くのよ。^{やつぱ}」

「坊さん、——酔つてるな。」

「何を、……むしゃくしやるから、台所へ掛合つて^{ます}斟で飲んだ、飲んだが、何うだ。会費じゃあねえぜ。二升や三升で酔うような行力じゃねえ、酔やしねえが、な、見ねえ。……玉に白粉で、^{ぎよく}かもじと来ちやあ堪らねえ。あいよ、^{ねえ}姐さん。」

「止さないか。」

声をおさえて、真赤な木棍ねっこで、かもじをつついて、

「白粉に、玉と、この少し、蚊帳に映つて青白くつて、頬ほっぺた辺に

びんの毛の乱れた工合よ。玉に白粉と。……此奴こいつおいらんでいや

あがる。今夜の連中にこのくらいなのは一人もねえ。」

土蜘蛛つちぐもの這込はいこむ如く、大跨おおまたを蜿うねつてずるずると秋草の根からに搦

んだ。

「野郎。」

かわす隙なく、横ぞつぽうへ、坊主の一棍を浴びながら、塔婆さつを颯さつと抜取つて、真三は蚊帳を蹴けた。——これが庭の方へ遁にげられると仔細はなかつたのである。

小盾こだても見えず、姿見を傍かたわらに、追つて出る坊主から底かばうのに、我

を忘れて、帷子かたびらの片袖を引切りひつきぎまに、玉香を包み、信女おを蔽おうた。

「この野郎。」

ぬつくりと目さきに突立つ。

かかる時にも、片袖ぶざまきれた不状なるよりは……とや思う、真三は、ツと諸もろはだ膚に払つて脱いだ。唯と、姿見に映つた不思議は、わが膚のかくまで白く滑らかだつた覚えはない。見る見る乳もふつくりと滑らかに、色を変えた面おもてもさながらの女である。

この膚、この腕かいなに、そのトタンに、二撃三撃を激しく撲ぶたれた。撲れながら、姿見の裡うちなる、我にまがう婦おんなの顔にじつと見惚みとれて、乱れた髪の水に雫しずくするのさえ確しかと見た。やあ、朱塗の木棍ねっこは、白

い膚を虐^{さいな}みつつ、烏賊^{あぎ}のれが臭^{におい}を放つて、また打つとともにムツと鼻をついた。

「無礼だ、奴^{ずくにゆう}入道。」

真三の手が短刀に掛った。

筆者は……実は、この時の会の発起人^{いちにん}の一人であつた。敢^{あえ}て言を構うるのではないが、塔婆^{ねや}の閨^{あずか}の議には与らない。

楨君は腕の骨を損じた。棍元教の先達は木棍を握った手の指を落した。真三は殺すまでもないが、片手は斬落そうと思つたそうである。

二人は、まだ病院に居る。

怪我はこれだけでは済まなかつた。芳町辺の一むれが、幹事まじりに八九人、この大池の公園をめぐつて、しらしらあけに歸つたのが、池の彼方かなたに、霧の空なる龍宮みどうの如き御堂みどうの棟しずかを静な朝波の上に見つつ行くと、水を隔てた此方こなたの汀みぎわに少し下る処に、一いつつびびき

正倒れた獸があつた。蘆あしの穂とどが幽かすかに、おなじように細い残月に野末なびに塵ちりく。あたりの地は塵も留めず、掃き清めたような処に、その獸は死んでいた。

近づくしろぶちくと白斑しろぶちの犬である。だらりと垂れた舌から、黒い血、いや、黒蛇くろくちなわを吐いたと思つて、声を立てたが、それは顚あごのまわりをかけて、まっすぐに小草に並んで、羽を休めたおはぐろ蜻蛉の群であつた。

こればかりでない。その池のまわりをしばらくして、橋を渡る、水門の、半ば沈んだ、横木の長いのに、流れかかる水の底が透くように、ああ、また黒蛇の大おおきなのが、ずるりと一ひとすじ条。色をかえて、人あしの橋に乱るとともに、低く包んだ朝霧を浮いて、ひらひらと散ったのは、黒い羽にふわふわと皆その霧を被かぶった幾千百ともない、おびただしい、おなじかねつけ蜻蛉であつた。

触つたもの。ただ見ただけでさえ女たちは、どツと煩わづらつた。

塔婆は幹事、発起人のうちで、楨君から、所をきいて、良圓寺と云うので心ばかりの供養をした。縁類は皆遠く他国した。あわれ、塔婆のぬしは、仔細あつて、この大池に投身したのだそうである。

——場所は、たいがい、井^いの頭^{かしら}のような処だと思っただけ
ば可^いい。

（『女性』一九二四「大正一三」年一〇月号）

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇 鏡花百物語集」ちくま文庫、
筑摩書房

2009（平成21）年7月10日第1刷発行

初出：「女性」

1924（大正13）年10月号

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

露萩 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>